



Title	詩的衝動力としての「エロス」の問題 -W. Whitman と R. M. Rilke の場合-
Author(s)	新井, 章慶
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1970, 11, p.79-90
Issue Date	1970-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10069/9585
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-19T02:43:21Z

詩的衝動力としての「エロス」の問題

—W. Whitman と R. M. Rilke の場合—

新 井 章 慶

On Eros as a Poetic Impulse

—In the Case of W. Whitman and R. M. Rilke—

AKIYOSHI ARAI

《序》

W. Whitman (1819—92) が「草の葉」の詩人であるならば、P. M. Rilke (1875~1926) は「薔薇」の詩人であった。雑草が、所をえらばず至るところに逞しく生い繁るように、Whitman は、あらゆる人とあらゆる物を受け入れ、殆ど、それらの中に自分を同化させることができた。彼は民衆のことばで歌う気どらない民衆の詩人であった。一方、生涯を通じて、薔薇を愛しつづけ、たくさんの薔薇の詩をかいた Rilke は、まさに薔薇の花のごとく精緻で、気むずかしい言葉の造形者であった。前者は、けたたましい機関車のとどろきや、港を出入りする汽船の壮観に、人類調和の明日を夢み、後者は、ヨーロッパ大陸にひたひたと押しよせるアメリカ機械文明の波にむしばまれていく人間の「内なる世界」の荒廃を嘆いた(Rilke にとってアメリカは“絶対の空虚であり、グロテスク”⁽¹⁾でさえあった)。一方、Whitman は、若いアメリカという、とにかくも合意された一つの価値観の世界に生きて、思いきり自己の歌をうたいあげることができた。確かに多くの誤解や中傷には出会ったが、彼は結果として、いかにも幸福な予言者であった。しかし、Rilke はそうではなかった。もはや死せる魂のキリスト教にも、安物のデモクラシーにも、また共産主義思想にも同意できなかつた Rilke は、第一歌うのに人々と共通なことばを持たなかつた。彼は、自己の確固たる世界につきあたるためには、長年、暗い孤独の淵に身をふかく沈めねばならなかつた。だから、いわば、これら二人の詩人の使ったパレットの絵具に、極端な色あいの違いがあったとしても、一向下思議ではない。ところが、こうして出来上った二人の作品の異質な外見を注意ぶかく見つめていると、私は、これら異なった二つの魂が、何か奥のほうで、ひっそりと一つの親和力で結びついているのに気づくのである。私は、むしろ、このことに強い関心を持たせられる。それが一体どんなものであるか。極限的な言語美の探求者 Rilke と、直截でなまなましい民衆のことばで歌う Whitman との間に、どんな魂の親和があったのか。私は、その事をまず「詩的衝力としての

エロス」という問題に焦点をしばって論じてみたいと思う。《Ⅰ》では、Whitman の詩 *To the Garden the World* を中心とし、《Ⅱ》では Rilke の詩 *Die Sonette an Orpheus, II-13* を中心とし、《Ⅲ》では総合比較のうえ結論を出す予定である。

《Ⅰ》

TO THE GARDEN THE WORLD

To the garden the world anew ascending,
 Potent mates, daughters, sons, prelude,
 The love, the life of their bodies, meaning and being,
 Curious here behold my resurrection after slumber,
 The revolving cycles in their wide sweep having broughe me again,
 Amorous, mature, all beautiful to me, all wondrous,
 My limbs and the quivering fire that ever plays through them, for
 reasons, most wondrous,
 Existing I peer and penetrate still,
 Content with the present, content with the past,
 By my side or back of me Eve following,
 Or in front, and I following her just the same.

(Children of Adam)

〔世界という楽園を目ざして新たにのぼりゆき、力づよい配偶者たち、娘たち、息子たちの先触れをつとめ、彼らの肉体の愛、その生命を志しつつみずからもそれを体現し、不思議なるかな今ここにまどろみのあとのぼくのこの蘇生、幅広い軌道を描いてめぐりゆく歳月の周期がふたたびぼくを蘇えらせ、成熟し、多情で、すべてがぼくには美しく、すべてがただもう素晴らしく、ぼくの手足とそのなかを絶えず流れつづけるゆらめく火とが、とにかくまことに素晴らしく、現在に満足し、過去に満足し、今ここにありてぼくは前方を窺いつつなおも進みゆく、ぼくと並んであるいはぼくの背後からイヴがつづき、あるいは前にまわれれば、今度はぼくが同じように彼女のあとにつづいて進む。(2)〕

この詩は、Whitman のものとしてはむしろ抒情的なほうで、あの雑草のように不羈奔放な彼の大詩集 *Leaves of Grass* のなかではいくらか異色な印象を与えるかもしれない。しかし、それにも拘らず、いや私には、それだけかえって初々しく詩人 Whitman の内心が露呈していると思われるので、あえて Rilke の詩(Ⅱの部で掲げる予定)と対比させる意味で冒頭にあげてみた。

イヴは Whitman の「エロス」の具現である。画家ルノワールが豊満な女体の魅力にとりつかれて、至るところに女体のヴィジョンを見たように、そしてそれなしには、ルノワールにとって、どんな文化も自然の美も色あせて空しくみえた様に、ちょうどその様に、イヴは Whitman の燃える「いのち」の赤色であった。イヴとは、彼にとって特定のものであり、また不特定のものでもあった。彼には、あれにも、これにも *amorous* (欲情的)な「いのち」の火が内がわから透けてみえた。つまり彼が見るもの、触れるもの、ことごとくがイヴの魅力をもって彼を引きつけるのであった。もし現実一人の女性がいたら、彼はこう歌うのである。

A woman waits for me, she contains all, nothing is lacking,/ Yet all were lacking if sex were lacking, or if the moisture of the right man were lacking.... I draw you close to me, you women,/ I cannot let you go, I would do you good,/ I am for you,

and you are for me, not only for our own sake, but for others' sakes,/ Envelop'd in
 you sleep greater heroes and bards,/ *They refuse to awake at the touch of any man but
 me...* Through you I drain the pent-up rivers of myself,/ In you I wrap a thousand
 onward years,/ On you I graft the grafts of the best-beloved of me and America,/
 The drops I distil upon you shall grow fierce and athletic girls, new artists, musicians,
 and singers,/ The babes I beget upon you are to beget babes in their turn,/ I shall
 demand perfect men and women out of my love-spending,... I shall look for loving
 crops from the birth, life, death, immortality,/ I plant so lovingly now. (Children of
 Adam) (イタリックス筆者, 以下同じ)

こういう詩は、当時、内容が良俗に反するとして大いに社会の非難を浴びたものであるが、
 ここには二重の意味が内包されているようだ。まず「性」は醜いものではない。醜いのは、「性」
 を卑猥な心をもって見たり、行為したりすることである。Whitman にとって“死が崇高であ
 るように、性交もまた崇高である”。¹³⁾ 女性は、未来の“純潔な愛と正義”¹⁴⁾ の人間たちを生子だ
 す門であるが故に神聖である。彼女らは讃美されるべき楽園のイヴたちである。しかし、これ
 と重なってもう一つの隠れた意味がある。それは、上記イタリックス部分を中心として暗示さ
 れている言外のところである。すなわち、Whitman が痛切に求めているのは、異性の肉体と
 いうよりは、彼の「精神」の無数の継承者たちであった。Whitman の内なるアダムは一人であ
 ってはならない。たくさんのアダムは、たくさんイヴと結ばれ無数の英雄たちを生子ださ
 ねばならない。Whitman は多くの男たちの内なるアダムに自己が分身するのを感じず。だ
 から Whitman は イヴ たちが至る ところに彼を待ちうけているのを感じるのである。彼の
 精神は、ひからびた倫理学のテキストではなく、エロスの火の爆発的なうずきであった。

あの Rilke は肉体的快楽の純粋なありかたに言及したある手紙のなかで、こう言っている
¹⁵⁾：“精神的な創造もまた肉体的創造に由来するものである。……それは肉体的快楽の、より
 精妙な、より恍惚たる、より永遠的な形の反復である。……一人の(精神的)創造者の思想の
 なかでは、忘れられた数千の恋の夜がよみがえり、それは彼を高貴と卓越でいっぱいにする。”

Whitman も、自己の内からみなぎる思想の圧力が、どんなに性的な衝動と等質であるかを
 知っていた。そして、そのような精神のみが、あらゆる人間を生かす「いのち」の喜びとなり
 うること。現に自分がそうであることが彼の自負心でもあった(They refuse to awake
 at the touch of any man but me はそれを仄めかしている)。こうして、すべての男と女から新しい
 「いのち」の形体を生子ださせようとする Whitman の創造精神は、機会をみては“射精”¹⁶⁾
 せずにはおれないのである。

“恋情にみち(amorous)、成熟し、すべて僕に美しく、すべて驚くべく、僕の手足とそのな
 かを絶えず流れつづけるゆらめく炎。”(冒頭詩 To the Garden the world)

楽園をゆくアダムのように、Whitman はこの世を歩く。彼は花嫁と寝る花むこの有頂天を
 見れば、そのままそれを自己の自我のなかに取りこんでしまう。自・他、渾融した一つの大き
 な自我のなかで、彼はその歓びを共有する。

I am a free companion, I bivouac by invading watchfires,/ I turn the bridegroom out
 of bed and stay with the bride myself,/ I tighten her all night to my thighs and lips.
 (Song of Myself, section 33)

ホイットマン研究者のなかには、上記詩に見られるこの様な Whitman の性感覚は objective なものではないから性的倒錯の一種 autoeroticism (自己発情) だと断定しているものさえいる。(7) (しかしながら、Whitman の性感覚の問題に関しては、もう殆どあらゆる彼の行動の記録と知己たちの証言が検討されたけれども、彼を性倒錯者とみるかどうかについては、意見が一致していない)

Whitman は、1888年 (69才)、自己の詩業を回顧した文のなかでこう言っている。"Leaves of Grass は、ある観点からみれば、明らかに「性」と「恋情」さらには「獣性」の歌でさえある——ただし、これらの言葉とは矛盾する意味が、すべての詩のうしろに隠されているのだが、やがてその意味は現われるだろう。私の詩は、すべて常とは違った風光のなかで読まれねばならない。"

たしかに我々は、「性的な要素」が彼の作品で果している独特な働きを見のがすことはできない。たとえば、大地にたいして彼はこう呼びかける：

Smile O voluptuous cool-breath'd earth! Earth of the slumbering and liquid trees!
Earth of departed sunset--earth of mountains misty-topt! Earth of the vitreous pour
of the full moon just tinged with blue!...
Far-swooping elbow'd earth -- rich apple-blossom'd earth! Smile, for your lover
comes.... Prodigal, you have given me love-- therefore I to you give love! O unspeakable
passionate love. (Song of Myself, sec. 21)

また海にたいして彼は呼びかける：

You sea! I resign myself to you also-- I guess what you mean,/ I behold from the beach
your crooked inviting fingers,/ I believe you refuse to go back without feeling of me,
We must have a turn together, I undress, hurry me out of sight of the land,/ Cushion
me soft, rock me in billowy drowse,/ Dash me with amorous wet, I can repay you.
(Song of Myself, sec. 22)

この様に、大地も海も、Whitman にとっては官能的な恋人のすがたをしている。Rilke がちょうどそうであった。彼にとって自然は単なる物の世界でも、単なる詩の素材の宝庫でもなかった。「自然」にたいして、Rilke は、生きて鼓動する恋人の胸を感じるがあった。たとえば、

O Haus, o Wiesenhang, o Abendlicht,/ auf einmal bringst du's beinah zum Gesicht/
und stehst an uns, umarmend und umarmt.
〔おお、家よ、おお、草地のなぞえよ、おお、夕べの光よ。とつぜん、お前はひとつの顔となり。
私たちの胸によりそい、抱(いだ)き、抱(いだ)かれる。〕

さて、平和な大自然を熱愛する Whitman は、一方、巷の人々をこの様に感ずる。

My lovers suffocate me,/ Crowding my lips, thick in my pores of my skin,/ Jostling
me through streets and public halls, coming naked to me at night,... (Song of Myself,
sec. 45)

また自然にもどると、Whitman の夜明の空への讚美はこんな表現さえとる：

To behold the day-break! / The little light fades the immense and diaphanous shadows, /
The air tastes good to my palate. / Hefts of the moving world at innocent gambols
silently rising freshly exuding, / Scooting obliquely high and low. / *Something I cannot
see puts upward libidinous prongs. / Seas of bright juice suffuse heaven.* (Song of Myself,
sec. 24) (注: prongs は男の性器を意味する)

この様に人間はもちろん、物たちまでが無表情な仮面をぬぎすてて、彼をセクシュアルな感觸で夢中にさせる。sex imagery は、彼にあっては詩技法以上のものであった。まるで、せせこましい自我意識にとらわれない原始人のヴァイタリティと、途方もない想像力が、Whitman の作品には躍動しているのである。その点、私は例えばピカソの芸術に横溢している、あの雄勁な「いのち」の描線を連想させられる。両者は真の芸術のみがもつ魔性的なものをふんだんに共有している。

しかしながら、Whitman の「官能性」は、ピカソの半人半獣「ミノトール」が象徴するような淫奔な生命力の原形とそのまま同位置にあるものと見ていいだろうか。私には、そうとは思われないのである。現にそのことを反証する Whitman 自身の言葉がたくさんある。たとえば、彼の代表的な論文 Democratic Vistas (1971) の中で、おもしろいことに彼は、当代アメリカ人たちの異常な好色性 (libidinousness) (上述 *libidinous prongs* と対照) を、またそういう大衆に迎合する小説家たちの軽薄な扇情性をはげしく批判している。

1876年序文のなかでは、“単なる愛欲 (amorousness) (これも既出 *amorous* の語と対照的) に固執した詩は、……今や宇宙精神 (the cosmic spirit) の輸血によって新生されなくてはならない”と言っていることに注目したい。

それでは、Whitman の「性」と「獣性」の背後にはどんな意味が隠されているのだろうか。Song of Myself, sec.45 (1855) には、時間と空間の気の遠くなるような無限さが歌われたあとで、次の一句が最後にやってくる。

*My rendezvous is appointed, it is certain, / The Lord will be there and wait till I come
on perfect terms, / The great Camerado, the lover true for whom I pine will be there.* (注:
Camerado=Comrade)

それから15年後にふたたび、詩 Gods (1870) のなかに、

*Lover divine and perfect Comrade, / Waiting content, invisible, but certain, / Be thou my
God, / Thou, thou, the Ideal Man, / Fair, able, beautiful, content, and loving, / Complete
in body and dilate in spirit, / Be thou my God.*

また彼の傑作 Passage to India (1868) のなかにも同じ表現が見られる。こうした詩句に出会うとき、私には次のような考えが自然に浮びあがってくるのである。すなわち、彼の作品に生き生きと脈動する「官能性」の秘密は結局、rendezvous (ランデブー) への情熱にあったと言えるのではないか。世俗のレベルで言えば、それは愛人との「出会い」「逢引」への情熱あるいはその喜びであったのではなからうか。文中の Lover は普通、男性であるが、Whitman の情緒では、それはむしろ異性的な魅惑性を濃厚におびている。彼は、かつて自己の肉体と自

己の魂とが抱擁しあうヴィジョンを体験したことがあるらしい (Song of Myself, sec. 5). その時の言いがたいエクスタシーの実感をとおして、彼は人間（そして他のあらゆる物も）はすべて *divine* な愛のなかに生きる無限な存在であることを知ったと歌っている。神とは、やがて顕現するところの人間の *Being*⁸⁾ のことである。Whitman においては、人間と神とは何の隔絶もなしに一つにつながっている（これは Rilke についても言える）。彼が魂との抱擁を体験したということは、自己の（そしてあらゆる人間と物の）“*Being*” との「出会い」の恍惚を *foretaste* したということである。既出の *the cosmic spirit* によって新生するとはこういう体験をさしているのであろう。さらにレベルを下げて言えば、肉の喜びはすでに靈のよろこびの前味（こういう言葉が使えるならば）である。ときに人間がそれによって自らが食い滅ぼされることさえも許すあのすさまじい「愛欲」の魔的な力は、「無限なるもの」への神聖な衝動のネガ（陰画）的な表出であるかもしれない。Whitman はその事を知っていて、あの不思議に清冽な芳香を発散する青草たち (*Leaves of Grass*) の肥土として「肉体」と「性」をばらまいたのである。

たとえば、男女の性の交わりを歌った詩、*One Hour to Madness and Joy* は私にタントリズム行者⁹⁾ の東洋のエロティシズムの聖化を思い出させる（彼らは放埒な性の興奮をそっくりそのまま肯定しつつ、それをある内なる視野に収斂することによって靈肉一如の境地に参入するという）。Whitman は、その様な超絶的エクスタシーをこの強烈な性的イメージのなかに暗示しているかのようである。彼にとってみどりの草が単なる爽やかなみどりの草でないと同じように、性のオルガズムは他のあらゆる時間から切り離された快樂の束の間ではなくなる。それは“今日とそしてどんな日にも、あるがままの状態で自分は満ちたりている” (*To have the feeling today or any day I am sufficient as I am.*) という感情を持つためにある。それは一時間の充溢と自由をやがて「生」のすべてのひろがりとするためにある (*To feed the remainder of life with one hour of fulness and freedom! With one brief hour of madness and Joy.*)

Rilke は、第五悲歌のなかで、初心者のみずみずしい驚きにみちあふれた「生」を失ってしまった現世の大人たちを嘆いているが、その様な失われた「生」のするどい味わいを Rilke は“初めて交尾をこころみる若い動物たちのような”と歌う。それと全く同じく、Whitman の情熱とは、「生」のグラスからしたたり落ちる一滴、一滴がすべてこの凝集された肉の歓喜に匹敵する密度を持つことであった。彼が *Every hour the semen of centuries, and still of centuries (Myself and Mine)*¹⁰⁾ と言ったのは、この事であったはずである。だから、別のある詩においては、女性への愛の想いの抗しがたさ、永遠性が歌われながら、とつじょとして別種の愛がうかび出てくるのである。

Fast-anchor'd eternal O love! O woman I love! O bride! O wife! more resistless than I can tell, the thought of you! / Then separate, as disembodied or another born, / Ethereal, the last athletic reality, my consolation, / I ascend, I float in the regions of your love O man, / O sharer of my roving life. (Calamus)

〔しっかりと錨をおろし不滅となったおお愛よ、おお、ぼくの愛する女よ、おお花嫁よ、おお妻よ、言葉ではつくせぬほどに抑えがたい、あなたのことを想うぼくのこころよ、そしてやがて離別し、さながら肉体から解脱し、あるいは新たに生まれた別人のように、靈妙となり、逞しい窮極の実体となって、そのことにわが心を慰められつつ、ぼくは昇天し、君の愛がみなぎる領域を浮遊する、おお、男である君よ、おお、奔放に流浪するぼくの生活に荷担する君よ〕⁶⁰

(この詩に関して、あらかじめ留意したい点を述べておく。普通研究家は、Whitman 自身が区別して使っている二つの言葉 “amative love” (女性への愛) と “adhesive love” (男と男の愛) をここに当てはめて、上記の詩は、“amative love” に優越する “adhesive love” すなわち男対男の愛の崇高さ、すなわち Whitman 窮極の理想 Comradeship を歌っているのであると説明しているようである。確かにこの詩が属している詩群の題名 Calamus (しろうぶ、もしくは、しろうぶの根) 自体が男性のしるしである男根を意味するくらいだから、その説明に間違いはない。ただ私は、この O man の man は、「男」だけに限定しては、Whitman の真意は捐われてしまうのではないかと思う。man は文字どおり「男」であっても、真意は性別を超えた「人間」である。だから「女」であっても差し支えないのである。要は心的態度である)。

さて先に、この詩について私は、“とつじょとして別種の愛がうかび出てくる” と言った。しかし二つの愛に区別はあっても、ほんとうは真の断絶はないのである。なぜなら「性」の喜びは、“肉体が離脱した、靈妙な (ethereal) 「愛」のエクスタシーの反映であり、また「それ」への指標である。W. Blake も言うように“山羊の情欲は神の豊饒である。”⁶¹しかし、“すべてが、我々の目前に本来の神性をもって現われるためには、まず知覚の窓が清められねばならない。”⁶²清められた認識の扉を通してはじめて、性愛の歓喜は ethereal な窮極の「実在」(the last athletic reality) に至りつく。そして其処には、“Whitman の恋いこがれる、聖なるまことの恋人が待っている” のである(引用ずみ) (“Lover divine” とはあらゆる人間の実体 Identity⁶³あるいは Being である。だから彼は、それを the great Camerado あるいは perfect Comrade と呼ぶ。「彼」あるいは「彼女」は我々の“肉眼には見えない”が、我々の最後の自己実現を待ちこがれている)。

Whitman が、ときに春画を文字で書くように、女体および女体との交わりを歌うのを我々が読むとき、我々はふと、そこに<永遠に女性なるもの>を感じることがないであろうか。画家アングルの「泉」の女のあの靈妙、静謐なイメージが、Whitman の荒々しい即物的タッチの背後から現われてくることだってありうるのである (I Sing the Body Electric, sec.5 参照)。それはどうしてそうかと言うと、彼の Sexuality (官能性) というのは、「可視的なもの」のずっと奥に待ちこがれている、ある “ethereal” で、かぎりなく美しく、そしてかぎりなく善き<一者>との間近かなランデヴーの予感から来たものだからだと思う。現に、すでに言及したところの Whitman の魂体験はこの上なく Sexual なことばで表現されているのである。中世紀の神秘家スーズは、自己の魂が聖なる天上の処女に抱擁されるヴィジョンを見ることによって見神の体験に達したと言われている。Whitman の体験もそういう質のものだったであろう。また、そのようなヴィジョンが去った後も、再びそれが遂げられるという、日常生活の

なかでの予感——恋人との秘密の出会いへの確実な見込みからくる高揚感。それが、ときには異常とも思われる Whitman の官能性の秘密だったのではないだろうか。彼の親しい知己であり、精神病医であった M. Bucke は、Whitman を、宇宙意識の体験者として、W. Blake や J. Böhmén と並べて、同名の著書 *Cosmic Consciousness* のなかで論じているが、我々は肉体と物質文明の最大の讃美者であったこの Whitman が どんなに熱意をこめて“invisible”で“spiritual (=ethereal)”なものを“あらゆるものの中で最も誇り高く、堅固で永続するもの”¹⁰⁹と呼んでいるかを知っている。

この様な彼の矛盾を彷彿させるエピソードがある。それはこうである。Whitman が *Comradeship* のシンボルとして歌っている *Calamus-root* は、じつは男の性器であるということももう研究者の間で一致した定説となっているが、Whitman 自身はそれを尋ねられてもそうは言っていない。しかし *Song of Myself*, sec. 24では、彼は肉体のいろいろな部分を自然界の事物にことよせて讃えているがその中に、肉体のその部分を暗にさしてこう言っているところがある。

Root of wash'd sweet-flag! timorous pond-snipe! nest of guarded duplicate eggs! it shall be you!

[しっとり濡れる菖蒲の根よ、池にうずくまる臆病な鳴鳥よ、大切に守られている一対の卵の巣よ、ぼくが崇めるのは君たちだ] (注: sweet-flag=calamus)¹¹⁰

これは、ずいぶんあからさまな比喻で、それであることには疑う余地がない。それなのに、Whitman 自身がある英国の編集者から *Calamus* の説明を求められたとき彼の書いた返事はまるで調子が違うのである。彼はこう書いている: “*Calamus* は、こちらでは普通のコトバナなのです。キャラマスはたいへん大きくて芳香のある草あるいは根です。それは北部と中部諸州に自生繁茂している植物です。……私の本では、それは特異で靈妙な (ethereal) な意味に使われていますが、それはキャラマスの葉っぱがとても大きくて堅くとがっているということと、新鮮で、ぴりぴりする芳香があるためです。”

それで、研究家 Cowley などは、“Whitman はしらばっくれたのだ。この *Calamus* の題名のもとに書かれた詩群は肉体的な同性愛の詩である”とまで断言している。同性愛がどうかはしばらく置くとして、私は必ずしも Whitman がしらばっくれたとは思わない。むしろ、Whitman の残したこの二つの矛盾的叙述によってこそ、彼の *Sex* 観の全体像がみごとに浮き彫りされている様に思われるのである。つまり前者の詩句は、肉体のその部分を一対の卵の巣だとか、キャラマスの根だとかの比喻を使ってあるがまま即物的に讃美した。一方、後者の手紙では彼は、現象ではなくて、その詩句の「心」を説明したと取るべきだろう。すなわち彼は、肉体のその部分が持つ本来の面目——つまり“芳香ゆたかで、ethereal (非肉体的な) 面目を、読者一般に明らかにしたい気持ちにつよく迫られたにちがいない。だからこの様な外見上の矛盾が出てきたのである。「煩惱即菩提」は大乗仏教の逆説的な真理の表現であるが、このエピソードは何かひどく暗示にとんでいる気がする。”

さて、冒頭の詩、*To the Garden the World* に帰る。Whitman は新しい世界の楽園をめざして、精神のたくましい後継者たちを生みだそうとする。その衝動力の底には Eros の火が燃えたぎっていた。

Amorous, mature, all beautiful to me, all wondrous,
My limbs and the quivering fire that ever plays through them, for
reasons, most wondrous,
Existing I peer and penetrate still,
Content with the present, content with the past,
By my side or back of me Eve following,
Or in front, and I following her just the same.

もし、Whitman の “Leaves of Grass” という大交響曲に、それを導入するたった一つのライトモチーフがあったとするならば、私は上の詩句こそそれであると言えるのではないかと思う。平凡と日常性のこの世界における、つねに新鮮な瞬々の「出会い」(rendezvous) の喜び。それが、Leaves of Grass の唯一のライトモチーフである。私は、この本質的な部分において、Whitman と Rilke との間に相呼応するものがあるのを発見して、おもしろく思う。

Hier ist Magie. In das Bereich des Zaubers
scheint das gemeine Wort hinaufgestuft, ...
und ist doch wirklich wie der Ruf des Taubers,
der nach der unsichtbaren Taube ruft.

[此処にこそ魔術はある。この魔法の領域へと、平凡な言葉は高くひきあげられる、しかもそれは、見えないめす鳩を呼ぶおす鳩の呼び声のように真実だ.]

(“此処” 現世は、詩的たましいの目によって見れば、そのまま魔法の世界である。そこでは、“平凡な言葉” すなわち沈腐・平凡な事物でさえも驚くべき純粋な出来事となる。この世のものとごとくが、まるで求愛する鳥の声のように痛切ないのちに満ちている。求愛 [Werbung]¹⁰⁾ は Rilke の重要なモチーフであった。しかし真の存在感のなかで変容をとげた Rilke の“求愛” はもはや飢えたる欲望 (Begehr)¹⁸⁾ ではなくて、愛の想いにみちた春告げ鳥ののどからせき出る歓喜の歌であった。私は、Rilke の詩に Whitman のこだまを聞くおもいがする。)

Whitman は、1955年序文のなかで言っている：“この現象宇宙に一人の全き愛者がいる。彼こそ最大の詩人である。” Whitman はつづけて言う、“彼 (the greatest poet) は永遠の情熱を燃やす。彼は、幸、不幸、どんな運命がやって来ようと頓着しない。ただ追い求めるのは、日日、時々、甘美なる収穫のみ。他人にとっての障害と挫折は、彼にとっては接触と愛欲の喜びへの (to contact and amorous joy) 燃える前進のための燃料である。” (下線筆者) チェーホフに、「可愛い女」という短篇小说がある。“可愛い女” オレンカは、ひとりの男の愛情を得たとき、たちまちこの暗い世の中が輝やかしいロマンの世界と化してしまうのを感じる。そこでは、どんな散文的な日常の雑事も、どんな不平な出来事も深い意味にみちた詩の一句一句であ

った。彼女にとってすべての苦しみか、偉大な幸福への踏石であった。Whitman の生きかたも、ちょうどそれに似ていた。彼のところは卑俗な言いかたをすれば、「逢引」への向うみずな情熱に燃えていたと言えるのではないか。目に見え、皮膚にふれるもの、悉くが彼の Eve である。男でさえ、彼にとって Eve である。秋の夜、月光に照らされて一人の男と寝ること、それは彼にとって、どんな名声、どんな成功にも優る痛切なよろこびである。⁽⁴⁴⁾人間も、動物も、草木も、風も、すべてが鋭い魅力をもって彼のたましいを吸引する。それは、殆ど性的でさえあった (Bucke は、「自分は、ホイトマンに会うまで、自然からこれほど絶対的な喜びを享受する人間がいるなどとは思ってもみなかった」⁽⁴⁵⁾と言っている。また辛辣な研究家 Cowley でさえ、「彼は、しんからの民主主義者であり、不具者や蔑視される人々の兄弟であった」と書いている)。だから、Whitman の行くところ、何処にも Eve が現われる。しかし彼をそんなに夢中にさせた Eve とは何んであったろうか。それは外でもない。一切の現象の背後に垣間みえる“The Great Camerado”の顔であった。

I hear and behold God in every object,/... Why should I wish to see God better than this day?/ I see something of God each hour of the twenty-four, and each moment then,/ In the faces of men and women I see God, and in my own face in the glass,/ I find letters from God dropt in the street, and every one is sign'd by God's name,/ And I leave them where they are, for I know that wheresoe'er I go,/ Others will punctually come for ever and ever. (Song of Myself, sec. 48)

「彼女」(正確に言えば、God すなわち The Great Camerado は男女両性の所有者である)は、一切のもの“Being”である(それは、the soul, the real real, purport of all these apparitions of the real である)⁽⁴⁶⁾ Whitman には、あらゆるものの中に、霧をとおすように名状しがたい完全さと健やかさと美の《一者》が見える (One with inexpressible completeness, sanity, beauty).⁽⁴⁷⁾ 肉体をもってこの世に生き、人と物に接するということは「彼女」との全き「出会い」の予感に心が震えるということであった。(だから、本来この世の一つとして不完全なもの、醜いもの、卑しむべきものは無い。すべては等しく讃美され、愛されるために存在している。彼がデモクラシーの根源として Comradeship を唱えるとき、それは万人の内なる[つきつめて言えば、万物の内なる]⁽⁴⁸⁾ The Great Comrade (=Camerado) との交流を意味したはずである。それなくしては彼の言う divine average [神聖なる平凡人]⁽⁴⁹⁾ はありえなかったはずである。“接触と愛欲の喜びへの”情熱。そう言うよりほかない程に、Whitman にとって The Great Camerado との「出会い」の予感はやまなましいものであった。それが彼の詩作品をながれる sexuality の源泉であったのである。

All truths wait in all things,/... The insignificant is as big to me as any,/ (What is less or more than a touch?)/... I believe the soggy clods shall become lovers and lamps,... (Song of Myself, sec. 30)

[一切の真理が一切の物たちのなかで待機している……とるに足らないものが、ぼくにとって何ものにも劣らず大きい、(接触ほど、ささやかで、偉大なものはないではないか)……ぼくは信ずる、湿った土くれが、やがて恋人たちとなり、ランプとなることを、……]

しかしながら、彼の *sexuality* には最後のもう一步が用意されている。これを見落してはならない。それは、こうである。この地上のあらゆる肉体、あらゆる物たちは、いつ本性をあらわして歓喜のうちに、あの透明無比な《一者》 *The Great Camerado* そのものに融解してしまわないとも限らないということである。それは、我々（万象）を忍耐よく待っている我々の“見えざる”実体 *The Great Camerado* との「出会い」がついに全うされたあかつきにやって来るだろう。肉体の詩人、アメリカ文明の謳歌者 *Whitman* はこう言うのである：

“今、勝利の凱歌をあげている叫び声にたいして——感覚、科学、肉体、機械、そして樹木と大地などの自然の勝利の叫び声に対して、わが兄弟、姉妹たちよ、恐れることなく決然として叫び返せ。すべて覚醒した魂の内奥に育つあの確信のコトバを宣言せよ——幻影だ！亡霊だ！すべて虚構だ！と。……それは、今どんなに触知される存在であろうとも、やがて悉く魂のうちに変容し、雲散霧消して見えなくなるであろう。”⁽⁹⁾

Whitman の現世讃美は、いわば汎神論的「無」の深淵に咲いた美しい花ばなであったのである。これが、あの *D. H. Laurence* をして、その *Whitman* への最高の共感に反比例して苛立たしめたところの、*Whitman* の「性」の逆説であった。（Iの部終り）

〔註〕

(1) E. C. Mason, *Rilke, Europe, and the English-Speaking World*, Cambridge, 1961

(2) 訳文は岩波文庫「草の葉」（杉本喬，鍋島能弘，酒本雅之，訳）より借用した。

(3) *Song of Myself*, sec. 24では次のようになっている。

I keep as delicate around the bowels as around the head and heart, Copulation is no more rank to me than death is.

(4) この箇所は、この引用詩の省略されたある部分を要約したもの。

(5) R. M. Rilke *Briefe*, Insel Verlag 1950, S. 54

(6) 詩, *By Blue Ontario's Shore*, sec. 6, l. 8 参照

(7) Malcolm Cowley はその一人である。彼は特に *Whitman* のこの面に強い関心をよせて *The Works of Walt Whitman, Vo. I* の *Introduction* の中でかなり詳しくそれに触れている。

(8) *Democratic Vistas*: “Man, so diminutive, dilates beyond the sensible universe, competes with, outscopes space and time, meditating even one great idea.”

詩, *Laws for Creations* (Autumn Rivulets): What do you suppose I would intimate to you in a hundred ways, but that man or woman is as good as God?/ And that there is no God any more divine than Yourself?

(9) タントリウム：中世紀インドにおいて盛んであったヒンドゥー教の一派。宇宙の活動エネルギー性力（シャクティ）（女神で象徴される）を崇拜する。2派あり、右道派は温和で、いけにえも行なわない。しかし左道派はかなり極端な儀礼を行なう。例えば輪座崇拜というのは、男女同数の信者が夜集まってシャクティの顕現たる女性に五つの M（*madya* 酒, *mamsa* 肉, *matsya* 魚, *mudra* 印契, *maithuna* 交媾）をもって近づく儀礼である。ただしこの派の信者は社会的には、極めて真面目な生活を送っていたという。カジュラホ寺院、スーリア寺院のミトウナ像群（男女の性的結合の像）は有名。「愛する女に抱かれる男は外なるか内なるかを知らぬように、全智なるアートマンに抱かれたる、うつけみの自我は外なるか内なるかを知らぬ」（ウパニシャド）（中村元編，講談社，世界の文化史蹟第五巻〔インドの仏蹟とヒンドゥー寺院〕からの文を要約）

(10) 詩, *Myself and Mine* に次の言葉がある：After me, vista!/ O I see life is short, but immeasurably long./ I henceforth tread the world chaste, temperate, an early riser, a

- steady grower,/ Every hour the semen of centuries, and still of centuries.
- (11) 訳文は岩波文庫「草の葉」より借用した。
- (12) W.Blake, *Proverbs of Hell*: "The lust of the goat is the bounty of God."
- (13) W. Blake, *A Memorable Fancy*: "For the cherub with his flaming sword is hereby commanded to leave his guard at tree of life; and when he does, the whole creation will be consumed and appear infinite and holy, whereas it now appears finite and corrupt. This will come to pass by an improvement of sensual enjoyment."
- (14) *Democratic Vistas*: "There is, in sanest hours, a consciousness, a thought that rises, independent, lifted out from all else, calm, like the stars, shining eternal. This is the thought of *identity*—yours for you, whoever you are. as mine for me.... In such devout hours, in the midst of the significant wonders of heaven and earth (significant only because of *the Me* in the center), creeds, conventions, fall away and become of no account before *this simple idea*.... Like the shadowy dwarf in the fable, once liberated and looked upon, *it* expands over the whole earth, and spreads to the roof of heaven." (イタリックス筆者)
- (15) *Democratic Vistas*: "Then, noiseless, with flowing steps, the lord, the sun, the last ideal comes. By the names right, justice, truth, we suggest, but do not describe it. To the world of men it remains a dream, an idea as they call it. But no dream is it to the wise—but *the proudest, almost only solid lasting thing of all.*" (イタリックス筆者)
- (16) 岩波文庫訳より借用
- (17) "Werbung" については, *Die Siebente Elegie* 冒頭の部分を参照
- (18) "Begehr" の否定については *Die Sonette an Orpheus, I-2*, なお, これと関連した思想が同ソネットII-21にも歌われている。
- (19) 詩, *When I Heard at the Close of the Day* (Calamus) 参照
- (20) R. M. Bucke, *Cosmic Consciousness*, N. Y., E. P. Dutton, 1966, pp. 220.
- (21) 詩, *Thou Mother with Thy Equal Brood*, sec. 6
- (22) 詩, *I Sing the Body Electric*, sec. 5
- (23) *Preface*, 1876: "...joyfully accepting modern science, and loyally following it without the slightest hesitation, there remains ever recognized still a higher flight, a higher fact, the eternal soul of man, (*of all else too,*) the spiritual, the religious--..."(イタリックス筆者)
- (24) 詩, *Starting from Paumanok*, sec. 10; 詩, *As I Walk These Broad Majestic Days*; 詩, *Song at Sunset* 参照
- (25) *See Democratic Vistas* (1871)

(昭和45年9月30日受理)